



TITLE:

図書室めぐり 文学部図書室

AUTHOR(S):

CITATION:

図書室めぐり 文学部図書室. 静脩 1980, 16(3): 7-8

ISSUE DATE:

1980-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36862>

RIGHT:

(F) 利用者の希望事項

図書館に対する要求・希望事項の欄はa施設・設備、bサービス、cその他の三つに分けたが、回答の大部分は施設・設備に集中した。

施設・設備に対する要求としては、閲覧スペースの不足、机、椅子の改善、照明不十分、冷暖房の完備等があげられ、サービス面では開館時間の

延長を希望するのが最も多く、また、その他では、工事の騒音に対する不満が目についた。なおサービス面では昨年開架図書の貸出や開館時間の延長が実施されたことを反映してか、サービスの現状に対する満足、あるいは今後のより充実したサービスに対する励ましの意見がかなり多かったことを付言しておく。

— 図書室めぐり —

文 学 部 図 書 室

文学部は哲学科、史学科、文学部の三学科制のもとに現在40講座で構成されている。学生:1,387名、教官(非常勤講師を省く):88名、図書系職員(整理掛、閲覧掛):23名である。

図書施設としては、整理室と哲学科、史学科、文学部の三閲覧室、三書庫を持っており、本学教官及び文学部学生は書庫に入って自由に図書を検索することが出来る。書庫の中の図書は教室別にそれぞれ独自の分類表にしたがって配架されている。(同一系統の講座をまとめて教室と称しているが現在26教室である。)また三閲覧室には共同利用の参考図書を備えている。その他心理学、考古学研究室、古文書室及び羽田記念館にも各々所属図書資料を保管している。目録カードは文学部総合目録(著者名、書名)と、昭和26年以降編成のNDCによる分類目録を備えている。

歴史を顧みると、明治39年(1906年)9月文科大学が開設された時に初代附属図書館長、島文治郎助教授がその以前から蒐集して準備されていた図書を研究室に備えて学生に自由に利用する便宜を与えたことが本学部図書室の起源となっている。その後大正3年から同14年にかけて史学科、哲学科、文学部の順に書庫・閲覧室がつけられた。そしてその間、大正8年には大学令改正で文学部となり大正12年には従来の図書利用に関する研究室規則が改められてはじめて図書室規則ならびに細則が制定されて学部図書室制度の基盤がつけられたのである。



図書が文学部にとって最も重要な研究資料であることは今更云うまでもなく、そのために本学部では予算を出来るだけ図書費にまわして蔵書構成の充実を力を出してきたのであるが、創設以来70年余の今日蔵書冊数は60万冊近くになっている。その大部分は日本の学界のみならず世界的に輝しい業績をのこされた歴代の教官の努力によって蒐集された研究資料で稀覯書も多い。また教官個人の愛蔵書であった貴重なコレクションも数多く収蔵されている。図書室では昭和25年度以降受入た図書については増加図書月報及び特殊文庫冊子目録を作成している。本学部では取扱う資料にはあらゆる言語の文献が含まれているので職員は語学的、書誌学的知識をもつ必要があり、また学部の体系に応じて非常に精密なライブラリー・サービスをつとめなければならない。

昭和53年度の利用統計を調べると年間利用者数

は16,975人、利用冊数は55,972冊である。利用者の内訳をみると国内はもとより海外の研究者にも広く利用されているので、人文科学系研究資料のセンター的存在としての役割を果たすようになってきていることがわかる。しかしこの歴史と伝統を維持して発展してきた文学部にも書庫の収容力不足と云う大きな難問題が生じているのである。昭和54年3月末調査によると蔵書583,171冊にたいして書架の収容力は511,694冊で71,477冊分が不足となっている。しかも年間約1万冊ずつ増加している。このため哲学科、文学科の書庫では壁際、通路に書架を増設した結果通行を障害し配架作業にも困難をきたす程の窮状になっている。しかもこれだけの図書を所蔵していてもこれまでに購入しそびれた図書のあることに気がつくことも少くない。また学術情報の溢れている此の頃、研究者は現在の蔵書には決して満足せず絶えず新しい文献を追い求めるのである。そして自然科学系とは異って古い時代の文献も価値が高く、いつまで

も生きて研究に役立つのである。より充実した蔵書構成を必要とする本学部において書庫の窮状を打開すべく数年前から学部増改築委員会、図書委員会等で検討しているがなかなかむつかしい見通しである。

日本の大学図書館の近代化にともなって学術情報システムが確立され、やがて全国的なネットワークの形成される日もそう遠くはないと思われるが、そうなればなおさら本学部図書の利用率はますます増大することになると思う。その際文学部がこのすぐれた蔵書をもとにして人文科学系のセンター的図書館としてその機能を惜しみなく發揮し、より以上に学問と文化の向上に貢献出来るように躍進することを期待している。そのためにも書庫収容力の拡張とともに図書業務の合理的運営の基礎となる哲・史・文三学科総合のいわゆる文学部図書館の実現を切望する次第である。

「京都大学 欧文雑誌総合目録 自然科学編 1979年版」

刊行される

全国の公共的な学術研究機関に所蔵される学術的雑誌の総合目録である「学術雑誌総合目録 自然科学欧文編 1979年版」が文部省の監修の下に機械編集により昨年刊行されたが、標記の目録はこの中の京都大学分を電算機処理によって抽出したものである。

しかし、単に機械的に京都大学分を抽出したのではなく、所蔵箇所については、全国版には部局名しか記載されていないが、京大版では実際に雑誌が配置されている学科・教室図書室名等が記載

されており、詳細な記述となっている。さらに、巻末には、誌名の中の主要な語（キーワード）から雑誌を検索できる「キーワード索引」も付されており、正確な誌名が不明の場合でも、検索の手がかりとなるように考慮されている。

この目録は7年ぶりの改訂版であり、従来の手作業による編集のものと較べて、かなり利用し易くなっているので、学内における学術雑誌の相互利用の道具として、十二分に活用されることが期待される。